

別れの歌を高らかに 祖國の波止場

最後に、志半ばにして亡くなられた友に対し、衷心より哀悼の意を捧げ、今はただ人間を二度と再び極限状態に追い込むような事態を招いてはならないと心から願うものである。

略 歴

本籍地 岩手県二戸郡一戸町高善寺字

野田一一六ノ三

現住所 盛岡市前九年三丁目十一ノ二十

生年月日 大正十三年十一月十三日

終戦時の居住地 ハルビン

入ソ日 昭和二十年十一月二十二日

抑留地 ホルモリン地区 第二二七收容所

作 業 伐採、木材搬出、製材、鉄道建設

引 揚 昭和二十三年六月一日

引揚船 永徳丸

上陸地 舞鶴

我が人生

福島県 宮城 善一郎

一、回 想

昭和十九年五月三十日、私にも再び『臨時召集令状』がきた。召集令状は薄赤い紙なので、軍隊に召集されるとき『赤紙』がきたと言って、だれでも極限の緊張感に襲われた。

『赤紙』一枚で戦地に行かなければならないのだから当然である。当時、一錢五厘の郵便料で村役場に配達された。召集者の家庭には役場の小使さんがいかにもすまなさそうに「おめでとうございます」と言っけ置いていく。

…臨時召集令状：

『昭和十九年六月三日午後一時まで仙台騎兵第二十五部隊に入隊すべし』

宮城善一郎 殿

連隊区司令官 仙石太郎大佐 印

といったぐあいである。一錢五厘の命と言われた所以^{ゆえ}はここにある。

私は大正十一年一月の早生まれなので、開戦の翌年、十七年徴集（兵隊検査）である。肉がつかず背だけは一メートル七十の当時としてはノッポであった。検査の結果は第二乙種である。平時なら、国民皆兵といっても軍隊には無縁の存在なのだ。兵隊検査の体位ランクは、現役兵として入隊する甲種合格、次に第一乙種（開戦してからは甲種とともに現役兵として入隊した）、第二乙種、第三乙種、丙種と五段階になっていった。第三は虚弱体質、丙種は不具者や疾病者である。兵隊検査には性病検査もある。禪を外し、四つんばいになった壮丁（検査対象者）の局部の竿を軍医が勢いよくソグ。罹患者は膿が出るという。真偽のほどは今もってわからない。

「せめて第一乙種にしてください」と私は検査官に嘆願した。第一なら、なんとか胸を張って村に帰れたからである。現役兵を夢見た。「馬鹿者、徴兵検査を

何と心得るか……」大声でどなられた。しかし、戦局の悪化とともに丙種まで動員した日本だった。まさに国民皆兵である。最後は女子も竹槍の刺突訓練となった。

私が再度召集された五月末は、田植えを前にした馬での代かき、田植えの最盛期であった。現在と違い、すべてが手労働の農作業である。働き手の主力が動員されていくのは、首を締められるよりつらいことだった。

私には前年の三月五日に結婚した新妻がいた。その二十日後には第一回目と同じ臨時召集令状によって『若松歩兵第二十四部隊』に入隊し、速射砲中隊に配属され、四カ月間初年兵としての猛特訓を受けた。七月に召集解除となり、帰郷した。仙台行きは再召集である。母は私の制止も聞かず、仙台まで送ると言って私のそばから離れなかった。

昭和十六年十二月八日勃発した太平洋戦争（日本は大東亜戦争と呼んだ）の前年あたりから、一般家庭にも安く手に入る普及型ラジオが国策的に設置された。

連戦連勝の日本軍は開戦後わずか半年でストップした。ラジオから流れる軍艦マーチに続く大本営陸海軍部発表は景氣のよい敵殲滅だけだった。

戦争とは勝つことに決まっているものと思い込んだ。この戦争も三カ月で日本軍の大勝利に終わると、田舎青年の私は思った。長い日米外交渉なんてばかげている話で、武力解決が手取り早い手段と思った。それは戦争とか国力というものを知らなかったからだ。

しかし、再度召集された昭和十九年に至ると、アツツ、タラワ、マキンの日本軍守備部隊が次々と玉碎し、いずれの各戦線でも苦戦を強いられていることが、ひた隠しする報道の中にも感じられていた。

妻とは留守の労働要員として見合い結婚したが、中には兵營の面会所で、極端なのは写真見合いで結婚するのも珍しいことでなかった。

男子は戦場、女子は生産労働要員である。そんな時代でも、十カ月生活した二人には離れたい絆が生まれている。出征の日まで三日しかなかったが、妻は二人になると毎夜、私に抱きついて泣き明かした。半玉

のような二十歳の新妻がいとおしかった。親子も妻も、恋人も、一片の『赤紙』によって引き裂かれてゆく戦争の悲劇を胸にしてみた第一弾である。

神社での部落祈願祭は私で何人目であろうか、既に四人の戦死も出ている。

親戚や友人を招いた我が家での壮行会は、特配の清酒一升とドブロック、麦で造ったあめの飴餅がすべてだった。『ぜいたくは敵だ』だった。

カーキ色のスフでつくった国民服を身にまとい、腹に千人針の胴巻きをし、「武運長久」や寄せ書きをした日の丸の旗を肩にかけ、いっぱしの英雄氣取りで歓呼の聲に送られ、征途についた。

薄暗い家の中で妻に最後の別れを告げた。「今度は生きて帰れないかもしれない。もし妊娠していたら、仲人とよく相談をしてくれ、後は頼む、元氣でな」行ってくるとの言葉は出なかった。妻は私の言葉に涙を潤ませてうなずいた。こうしてすべての人々に別れを告げ、故郷を後にした。新緑に萌えた磐梯山にも別れを告げた。

汽車の中は混雑していたが、出征兵士には「ご苦労さま」と言つて席をあけてくれた。

母と並んで席にかけた私はしばし瞑想にふけた。出発前の忙しい日程の疲れもあったが、幼少年時代の思い出、四カ月の軍隊生活が走馬灯のごとく駆けめぐつた。母もさまざまなことを考えているのだろう、黙つていた。

最愛の我が子との別れの旅である。

母は初婚の夫に死なれ、四つの子を婚家に残して、私の父と再婚した。再婚当時は、十五代続いた士分格の旧家であつた再婚家が借金の連帯保証に家長が同意したため、五町歩余りの田畑と三反からの広い宅地が抵当となり、破産してしまつた。やむなく稲蔵に分家し、弱い父とともに、人並み外れた苦闘記の半生だつた。

これが母との最後の別れになるかと思えば、母の心情が衰れでならなかつた。「家貧すれば長兄の労多し」のとおり、私は母の苦勞を肌で感じ、可能な限りの手伝いをした。

働くことがすべてだつた父母は、私の一年生入学式にも付き添つてはくれなかつた。同じ部落の須藤君の祖父について四キロもあるでこぼこ道を歩いた。付き添ひなしは私一人だつた。三つ下の腕白組の弟、六つ違いの妹がいたが、手伝いの大半は私の手にかかつた。村じゅうの清水から天秤棒にバケツを両端に下げての飲料水くみ、川からのふる水運び、代かきの鼻取り（馬の鼻面に竹竿をつけ、水田の中で代かき馬の誘導をする）は、小学四年生からやつた。雨の日は蓑笠に隠れるような小さな体では馬の歩みが早く、泥まみれになつて転びそうな足早の鼻取りだつた。しかも、我が家のほか、親戚二軒をたらい回しだつた。借馬の返礼である。

高学年になると病氣がちの父の薬買い、入院も母とともにリヤカーを引いた。

「ゼン（私）がいたから、この家にいてしまつた」と母は苦勞話になると、いつもそう言つた。その言葉に反発したこともあつた。

長じて思うに、母のその愚痴は真をうがつていたの

に気づいた。裕福な娘時代から、嫁入りとともにいくばくも経ずして夫の死により離婚し、重ねて幼女とも生き別れ、再婚した家は破産し、幸せであるべき青春はズタズタに引き裂かれた母だった。私以外にどんな心の支えがあったであらうか。そうして時流は母と子を永遠に引き離そうとしていた。機関車音の響きが刻一刻とその現実を伝えていたようだった。

やがて列車は郡山駅に到着した。車窓に映った風景は、雑踏と喧騒で回想の夢を破った。南や北へ行く軍用列車には、すし詰めに兵隊を満載していた。一般人は少なく、私たちと同様、日の丸の旗を肩にした出征する若者も多くいた。戦争の現実が日の丸の小旗を振って「万歳バンザイ」と叫ぶ渦の中によみがえった。列車は仙台市に向かっていた。

「ゼン、体だけは大事にしるよナ」

母がポツリと言った。午後一時の入隊である。軍隊の現実が頭をよぎった。これでも既教育兵である。

昨年の三月二十五日、妻のヨシノと結婚して二十日目に入隊した。一回の見合いで結婚した見ず知らずの

妻に対する愛情は、二十日の別離では薄かった。一人前の軍人になれた喜びの方が大きかった。配属は「貴様、背が高いから歩兵砲だ」といったあんばいで速射砲（対戦車砲）に配置された。どろどろに汚れた軍服を着たときは、出征時の張り切った英雄気取りはどこへやら、まるで敗残兵の格好だ。「我が部隊は伝統ある白虎部隊である、貴様らをムツツリ、シゴイテやる。ここは娑婆と違うんだ」内務班の先任上等兵の訓示である。三日目から文字どおりの『二等兵物語』が始まった。六時の起床ラッパでたたき起こされて、起きては遅い準備をしてタヌキ寝入りだ。

教育係は幹部候補生の曹長、柏原長官、石井軍曹、初年兵係は戸山歩兵学校出の阿部、菅野、両上等兵だった。特に阿部は気合が入り、「俺は手が痛いから、これで殴る」と言って帯革（帯剣をつる広いバンド）の尾錠か上靴（革のスリッパ）が飛ぶ。口元がはれ上がり、三日くらい食事がのどを通らない。よその古年兵だと言っていたが、初年兵の一人で帯革ビンタで鼓膜が破れ疾病除隊となった兵がいた。不具にはなった

が、当時の戦況からいつて命拾いした公算が強いと思う。

会津若松市にあった『東部第二十四部隊』は、当時フィリピンに駐屯していた『歩兵第二十九連隊』の補充部隊だった。フィリピンから最前線に派遣された。ジャワ島を攻略し、ガタルカナル島の激戦地に派遣され、古宮連隊長が軍旗もろとも壊滅的惨敗をしたのも同郷土部隊だった。一期検閲を終え、四カ月たった私たちに、突然召集解除命令が出た。七月、ガ島から無言の帰還をし、舍前の営庭で慰霊祭が挙行されたときは、これが「作戦任務を終え転進した」と報じた実態かと驚いた。白木の箱で広い営庭の東西が埋まった。そして初年兵の私でも戦局の容易ならざるを知ったのが今もって記憶から去らない。

行軍の途次、私の家に立ち寄った兵が私の年を聞いて、「もうすぐ生き地獄だな」と言った言葉をかみしめる暇もない軍隊だった。

当時の嫁は奴隷同然の忙しさと待遇だったが、嫁の十年と初年兵の四カ月はつり合うと思った。そんな軍

隊を軽蔑するようになっていた。私の痰壺（二）等兵の一つ星をばかにした意）が相手の星に敬礼するので、私自身ではないと考えた。それを決定的にしたのは、補充兵でも幹部候補生の志願が許可された。しかし、高小卒の私ではいかに青年学校の本科、研究科の五年、定時的な軍事教練を受けていても、受験資格がない。私より演習も学科も劣る資格者に将校への道が開かれた。そんなばかなことがあるものかというのが、純粹な国粹主義者として精神鍛練をした私の論理であった。そんな現実的回想に浸っている間に列車は仙台駅に到着した。雑踏にもまれながら、目的の仙台騎兵第二十五部隊の営門にたどり着いた。

「オカ（母）、これでお別れだ、途中気をつけてナ」そう言う私の後について中に入ろうとした母に、「あととは中に入れないんだ」と母の肩をたたいた。

「ああそうか、じゃ、体だけは大事にしろよナ」そう言って母は私の消えるまで立っていたが、帰路について。五十近い母の後ろ姿を見て、無事に帰ればよいがと、心が残った。あつけない親子の別離だった。

エトロフ島守備、終戦

入隊手続が終え、被服や携帯食糧が渡された。今宵のうち夜行列車で出発との命令である。同郷の人も何人かいた。「おい、よろしく頼むよ」と気安く言ったが、軍服を着ると二等兵は私一人で、上等兵や下士官ばかりである。

「おい、頼むよ」が、軍服を着た途端、「上等兵殿」に変わる。軽蔑する軍隊ながら、巨大な軍権力の前では繕って生きねばならない。昨日の友は今日の主である。

それにしても慌ただしい出勤である。軍衣は冬服である。満州か千島か、いずれにせよ、北方派遣であることがわかった。重くデッカイ外套が渡った。手の先が隠れるほどの袖には赤い筋が入っている。明らかに日露戦争当時の古物である。

いつ津軽海峡連絡船に乗ったのかも気づかぬままに夜行列車は荒涼たる北海道の朝を迎えていた。ほどなく道東端の根室に到着した。復員後聞くとところによると、同村の小川久男軍曹（当時）は同年三月、小樽港

を出港し釧路沖で敵潜水艦の魚雷で爆沈され戦死した。既に戦況は日本海域まで敵潜水艦が跳梁するに至っていた。私たちの列車が深夜の津軽海峡を通過した訳が理解できる。

根室は軍関係でこつた返してあったが、寂しい町並みであった。低い軒をつらねた家並みが多く、六月というのにオホーツク海から吹く潮風は肌寒く、視界を遠のくガス（霧）が行く道をふさいでいた。どの家の屋根にも小さな箱を並べ、野菜をつくっている。淡緑色の小っちゃな野菜が潮風に泣いていた。この町も二十年に入ると、米艦載機グラマンの銃爆撃によって壊滅の運命に遭った。

私たちはこの町で新潟出身の横山憲一郎中尉を隊長とし、第八九師団独立混成第四三旅団として編制された。千島守備が任務である。

後日、教育隊に入隊して知ったことだが、フィリピン海域で日本連合艦隊の大半が壊滅し、制空権完全に失った日本に対し、米軍は次の攻撃目標を予告したと言われる。それが千島列島だという。慌てた日本軍

は急遽、増員部隊の派遣となった。在満の現役兵まで動員した。とうにアリユーシャン列島アツツ島守備の山崎部隊は玉碎し、濃霧に紛れキスカ島守備部隊は奇跡の撤退に成功。北千島のシムシユ、シャスコタン、マツワ、シンシル、ウルップ島の守備部隊も千島四島に集結しようとしていた。しかし、それは米軍の謀略で、翌二十年に入ると小笠原諸島の一角、硫黄島を直撃した。日本軍は二万余の兵力で摺鉢山に延べ十八キロの地下壕陣地を構築し、砲爆撃に対抗し、戦車を先頭に上陸する米軍を悩まし、同年二月十六日から同三月二十六日の約一カ月半の激闘の末、日本軍は玉碎した。

千島に日本軍を割くことは、米軍の本土上陸作戦を容易にする目的もあつた。しかし、周章狼狽の軍部は千島防衛に全力を上げた。兵員、糧秣を可能な限り搬送した。その一員として私たちはエトロフ島に派遣された。

だが、部隊の完全編制、輸送船の配備に手間取り、カフェ跡の部屋に屯し、根室の町に二十日間滞在した。

さすが根室は漁港だけあって、生きの良い魚をふんだんに食えた。私も魚の好きな母に一塩の生鮭を送ったが、到着の可否はわからなかった。しかし、最後のものとして写した軍服姿の写真は届き、復員後、それを手にして当時の回想に耽るときがある。

やがて出発のときがきた。乗船である。根室港の埠頭に千島派遣部隊は上官の号令で整列した、混雑した人を除けば寒々とした漁港である。カモメがジャジャと泣きながら海面を雄飛している。戦争に関係のない動物をうらやむ思いがよぎった。

兵隊が乗船したのは木造の小さな漁船だった。二十トンくらいの小船に完全武装の兵が十五人ずつ乗った。細い煙突から黒い輪の煙を吐きながら、多くの漁船が港を後にした。ポンポンと音を立てる焼玉エンジンである。時速六キロくらいだ。「敵潜水艦の魚雷も深度の浅い木造船では船底通過で安全だ」これが上官の話だったが、私は無感動で聞いていた。浮上して艦砲射撃をされたらどうするのか？ そう思ったが、言葉にするわけにはいかない。既に鉄船の輸送船は残り少な

い実情だった。

「ええ、ままよ」がすべてだった。外海に出ると海風は冷たく波が荒くなった。高波で僚船が見えず、独航船のようである。転覆の恐怖に怯えながら狭い船室に身をかがめていても、波しぶきが頭上に飛沫を上げる。たちまち山育ちの私たちは船酔いが始まった。出港前、船尾に板が二枚突き出た便所で用を足した。下は揺れ動く海面である。命がけの便所である。すきつ腹なのにゲイゲイとくる。波底に船が下がるときはゲイゲイが重なるほどの吐き方である。丸二日二晩、飲みも食いもせず、ゲツソリとして予感もわかぬ航海だった。

根室からエトロフ島の上陸地点トウロまで、約四百キロの地獄の海だった。

エトロフ島は東西二百二十キロに延びた細長い島で、全島、火山岩の軽石に表土が堆積し、這い松、白樺が密生し、年じゅう寒風とガスに見舞われ、枝の先が剪定したように短かった。谷の陰に唐松がわずかに伸びているにすぎない。鳥取県くらいの面積で千島列島最

大の島だった。中央東部のヒトカツプ湾は不凍港で、山本五十六大將がハワイ急襲のため連合艦隊を集結、発進したことで有名である。

ルチャルケ原の思い出

ヒトカツプ湾岸の天寧には飛行場もあり、ここを中心に七百四十世帯の民家があり、三千七百六十人の漁民が住んでいた。世界三大漁業地域の一つの拠点でもある。

北方方面軍の司令部もここにあった。一年後には、全島に七個部隊が配置され、二万余の兵力が守備に付いたと言われる。私たちはトウロに上陸した途端、死ぬほどつらかった船酔いがうそのようにケロリと治り、空腹の腹に飯盒をからにし、元氣を取り戻した。

駐屯地は十キロほどの大地キモンパラだった。休憩後も間もなく揚陸した六十キロの米俵搬送である。野戦電話線を目印に雑木や這い松をかき分け、高低のある道なき道を俵を背負って搬送する。体力のない補充兵にとって苦難のわざだった。この挽力搬送が果てしなく続いた。血の混じった小便が出たほどである。一

方では、五、六メートルも地面をはって枝をヒョッコリと上に向けている松の密林を切り、片づけ、スコップで表土をはがし、両側に掘った側溝の白い軽石を敷き詰める立派な道路に早変わり。三角幕舎をつくる者、伝令に走る者、すべてが未開の地に移住した開拓民のようだった。冷える闇を濃霧が絶えず流れた。時代物の外套が身を守ったが、しんまで濡れると石臼を背負っているほど重くなる。

ここで、我が部隊長の紹介があった。広川弘禪少佐である。僧侶からの出征だった。白ひげが目についた。温厚そうな老爺のようだ。根こそぎ動員の戦局悪化を部隊長の面立に見た思いだった。在島中、飛行場に友軍機を見ることがなかったのも、その一つである。

同郷の鈴木克己軍曹が私の班長で、彼に庇護された面も多かった。しかし、夜間、歩哨によく私を使った。理由は『うすのろ』の私だったが、よく歩哨の四則を暗記していた。巡察將校の尋問に事欠かなかったからだ。しかし、夜食に上がる玄米のおにぎりを卑しく食べた腹に濃霧が見舞いに来るから、たまったものでな

い。下番した翌朝は激しい下痢に悩まされた。キモンパラからルチャルケ原に部隊移動をした夜間行軍はひどかった。軍用具を木車に積んでの移動である。初年兵の私たちはいつも重労働を課せられた。このときの下痢は感覚がマヒするほど。隊列を離れ腰をかがめた翌朝見ると血便だった。軍医からの薬を飲んで休まず頑張った。

移動地のルチャルケ原は細長い島で最も狭く、太平洋とオホーツク海が見えるほどの平原で樹海もなく、小高い丘が点在し、スズランやリンドウ、ハマナスの花が露に濡れ手咲き乱れるロマンチックな風景であった。私はこの草原を夢に見るほど懐かしく思い出す。その風情は間もなく凄惨な戦場と化する地獄を忘れさせた。山際に隠ぺいする三角兵舎は、表土を掘って通路をつくり、両側を地床とし、草敷き布団の寝台となつている。屋根はパネルを三角に組み合わせ、その上にフェルトを張り棧でとめ、さらに対空防御のため丘草を張る。三角幕舎とは違った上等な兵舎だ。

ドラム缶の入浴は月に二、三回だった。兵隊の下着

にシラミがふえつつあった。

私がふる当番のある夕べ、広川部隊長が入浴した。湯から上がった部隊長の背を流しながら、私はおそるおそる尋ねた。

既に七月にはサイパン島の日本軍は玉砕していた。

私たち中隊の人事係、田崎曹長の記録によれば、エトロフに上陸したのが十九年六月十八日となっているから約一カ月後の玉砕である。同十一月には、日本守備軍が玉砕したマリアナ基地から発進したB 29の大編隊が東京を初空襲した。

「部隊長殿、サイパンが玉砕したそうですが、大丈夫なんですか……」

私の問いに……部隊長は、

「心配はないよ、すぐ奪回するよ」と言った。すぐのんびりした回答であった。

「そうですか……」と言った私は納得していなかった。二等兵の私が心配しているのに、少佐の部隊長は湯かげんに満足している。奇妙な会話だった。ルチャルケ原での思い出は深い。ガスの流れる草原に行く隊

列は、エンピ（スコップ）やツルハシ、鋸を肩にしての毎日である。小高い丘に洞窟をうがち、松材を組んでの陣地構築である。だれ歌うともなく「だれか故郷を思わざる」の歌詞が霧に乗って流れてくる。それぞれ明日なき命の中で故郷の山河、懐かしき人々の面影が胸を去来するのであらう。踏みしめる足下には露を含んだ紫のリンドウ、白いかれんなスズランの花がどこまでも咲き乱れていた。十月の島には青空もかいま見えるよい季節である。情緒的な風情だった。

このころ、我が中隊にもようやく四七ミリ速射砲四門、キャタピラー式の繋引車二両が配備された。実弾射撃も行った。将校、下士官は大喜びで操作訓練に余念がなかった。私が若松の連隊で訓練したのは鉄輪で臂力搬送の三七ミリ砲だった。四七ミリは米軍M 4戦車に対抗できる最新兵器だった。中隊が張り切ったのも当然だった。戦闘態勢ができたからである。

島に慰問団が来た。ソプラノ歌手『マリちゃん』の一行である。兵たちは喜んで白樺と笹で急造の舞台をつくり、その前に各隊の兵が敷き詰めにはんだ。開演

とともに嵐のような拍手である。色白の丸顔にドレスを着流し、首太の白いのどから流れるメロディは全員を陶醉させた。上陸以来、女性を見るのも初めてなら、若いドレスの女はまぶし過ぎた。舞台を流れる濃霧が彼女の姿をかすめ、幻想的であった。

得意の「ジャガタラお春」はいつまでも耳から離れなかった。その彼女も帰途の船が敵潜水艦に襲われ、海底に沈んだとの情報を聞いたときは啞然とし、無情な戦争を呪った。

田村大隊長がルチャルに着任したのもこのころである。彼はガダルカナル戦生き残りの勇者で、ルンガ飛行場に突入、敵将をしてSOSを発信させたが、川口支隊の後続支援がなく無念の敗退を強いられた。米軍の物量戦法を実戦で体験した希有の指揮官だった。戦車壕を掘る兵を前にして馬上から大声で「休憩」とどなった。さすがに響き通る声である。兵たちはびっくりして挙手の敬礼をした。

「君たちの命は十月まで余が保証する。その後はわからん。こんな壕は何の役にも立たん。敵の爆撃、艦

砲でたちまち地ならしだ。敵の弾薬消耗には役に立つかもしれない。兵は十分休養しておけ。余の頼みとするのは兵、下士官のみである。ご苦労さん」と言つて馬を跳ばして立ち去った。大隊副官をはじめ、将校たちはアッケにとられ、キョトンとしていた。上意下達の軍隊では初めて聞く言葉であった。兵たちも驚いた。私はおもしろい大隊長と思った。後日、私は下士候補教育隊に入つて、実戦で学んだ大隊長の言葉、姿勢が納得できた。

浜に打ち上げられた鯨の肉はぎに各中隊から競つて出動したのも、この時分だ。大鯨と見えて、一週間ほど通った。現地給与というわけだ。鯨食油でふろのドラム缶がネットネットになったほどだ。内地は戦場化しようとしていたのに、私たちは島へ避難に来たようなものだった。それにしても、キモンバラ駐屯地の幕舎に空き缶を手持って群がった残飯漁りの半島人（当時、朝鮮人の呼称）はどうしたであろうか？と思った。危険な作業に軍は彼らを使役した。巨大な陣地構築用の丸太を何人もかかって「ヤンチョ、ヤンチョ」とかけ

声を上げながら肩に担いで歩く姿を見たことがある。

後にこん棒を持った日本人の物騒な親方が監視しながらついていた。軍の中では、同じ立場の初年兵である私たちには親しんだ。「報国挺身隊だと言って徴用されたが、話とまるで逆だった。だまされて来てしまった。飯もろくにくれないで……」と私にそう言った。

下士候教育隊

現実、自分がそうなっていたから慰めの言葉もなかった。すべては戦争なのだと考えた。十月も終わるころ、下士候志願の通達があった。早速、私は志願した。田村大隊ではほかに小沢喜一郎という宮城県出身の二等兵がいた。私と違って恰幅のよい好男子である。私は当初、憲兵志願だったが、手取り早い下士候に転じた。親の許可が必要だったが、音信不如意を利して「出征のとき、許可を得て来ました」のうそが通じた。妻帯者は私一人だった。理由は簡単である。いつまでも二等兵の初年兵が嫌であること。勝つても負けても軍人以外に目標のない時代と思ったこと。それだけの理由である。ここまで来ては生死を考えても仕方なし

である。

軍隊は第一選抜で一等兵になるのに半年かかる。上等兵はさらに一年を要する。私は四カ月の既教育兵だったが、一たん帰郷すれば通算にはならない。再召集は新規出直しである。下士候教育隊を出れば三カ月ごとに進級し、半年の教育ですぐ下士官に任官できる。

努力さえすれば、曹長から少尉候補の道も開ける士官学校への望みも不可能ではない、そう私は考えた。ばかりにした軍隊でばかりにならなくなかった。前年、四カ月に召集解除になり営門から出たときは、自由な空気を胸いっぱい吸い、だれにも敬礼なしでの気ままを味わったものだが、再度の召集ですべてを捨てた私だった。

同郷の斉藤友之助上等兵に装具を背負ってもらい、中隊に別れを告げ、ルチャルケ原を後にした。草原や峡谷を越え、約七十キロの道のりだった。斉藤上等兵との二人旅を今も思う。

下士官候補教育隊は天寧の台地にあった。台上には十一月初冬の潮風に北海特有の濃霧を含み、先が思い

やられる寒風だった。白樺にまとわる風がうなりを立てている。兵舎は地上建築であり、電灯が灯っていた。四カ月ぶりの光であった。幕舎、三角兵舎ともランプと携帯ろうそくが手元を照らしていた。

総員四十名の隊員を二つに分け、第一区隊、第二区隊とした。隊員には半島人も四、五名いた、いずれも優秀だった。関東軍の若い現役兵が多かった。私は第一区隊に配属され、区隊長は記者上がりの美男子、温海中尉、補助官にM曹長だった。彼はキスカ撤収部隊で、昭和十一年帝都を震撼させた『二・二六事件』の決起部隊に参加した血の多い曹長で、いつも『貴様たちとこの島を死に場所にしよう』と言った。第二区隊長は小野少尉という丸顔の僧侶出で、こまめなタイプの方だった。教育隊の訓練はものすごいものだった。現役志願の兵を鍛えるのだから当然だった。入隊間もなく一等兵となり、三カ月後は上等兵になっていた。一人前の兵になった感じだったが、昼は作戦の学科、夜は襲撃演習と、仮眠もそこその猛訓練だった。二十二歳の若さは、これに耐えていた。同期だけ

の内務は疲れをいやす気楽な場所だった。野積みの糧秣集積を奪うネズミ族隊に参加したのも教育隊だった。バレればもちろん、軍法会議である。いわば捨て身戦法の訓練と体力作りの両面作戦である。

間もなく冬となった。絶え間なき海鳴りが視界を皆無にする。たたくような猛吹雪の日々が続く。夜襲訓練には持ってこいの条件として演習も続く。雪原に入っても稜線が見えず、防寒被服を通してくる寒気に震えながら一晩じゅうさまよい、朝の点呼にようやく間に合う始末だった。もうビクともしない一人前の兵隊に成長していた。

教育隊で学んだ最大の収穫は、米軍の戦法とこれに対する友軍の戦術だった。

区隊長、特に小野少尉は、どこから情報入手するのか、次のように説明した。

「我が守備隊は三十分の戦闘で弾薬が尽きる。後はゲリラ戦法だけが唯一の戦いとなる。まず米軍は空爆をもって谷を埋めるであろう。次に徹底した鑑砲射撃である。奥行きがないエトロフは防御に弱い。これで

チャチな陣地は跡形もないであろう。そして、水陸両用戦車を先頭に、戦車砲、機銃で横縦、ハタを織ったように掃射し、上陸部隊はその範囲しか前進しない。坪当たり鉄量を何トン撃ち込むか、という計算で攻撃してくる。これが米軍の上陸作戦である……」

これを聞いたとき、戦慄を覚えた。「これでは打つ手がないでしょう」と私は質問した。

「貴様の言うとおり、全くそのとおりだ。戦いを制することはできぬが、敵に打撃と恐怖に陥れ、持久戦に持ち込む、これが我が軍に残された唯一の戦術である。君たちは、そのため、これまで敵の飛行場、司令部、糧秣廠、弾薬庫の夜襲爆破、破甲爆雷による戦車の破壊に夜を徹して猛訓練を積んだのだ……」と説明訓示した。今にして田村大隊長の言葉をかみしめた。

私たち下士候は卒業目前にして兵長に進級した。襟の徽章に初めて金筋がついた。みんな笑みを含めた。もはや初年兵ではない。下士任官も目前である。訓練の苦労が遠のいた。

そして軍衣を互いに揺すり苦笑した。進級には関係

なく、体内のシラミはますます跳梁する。点呼で不動の姿勢をとっているとシラミの行列が首筋を上がってくる。むずがゆいが、手を伸ばすわけにはゆかない。大便是忙しく長くなる。脱糞しながらシラミ退治だ。洗紙のようになった越中褌を前に回し、ヒダを伸ばすと、折り目の中にシラミと卵が列をなしている。倅を

食い荒らした無言の敵である。一匹、一個ずつ両手の爪でつぶしてゆく。下着の上衣、袴下の縫い目も敵さんの陣地になつてゐる。シラミの攻撃は在島じゅう続いた。不潔な生活の衣服は、シラミにとって格好の要塞地帯であつた。野戦病院の動けぬ患者が貧血で死亡した。何のことはない、シラミの吸血が原因であつた。我々は余暇を探り、防御戦をやる。アルミでできた飯盒へ水で濡らした下着と褌を無理に押し込み、煮沸する。これでシラミは全滅だ。しかし、どうにもならない毛布に潜む敵さんがたちまち増援部隊を下着や褌に進駐する。その間一週間ぐらいで、元の表六となる。後日、シベリアまで移動した。笑えぬ「シラミ」との

苦闘記の一節である。

それにしても、飯盒とは重宝なもので、禪の煮沸、

洗面、選択の利器が飯どきは食器に早変わりする。これが日常なのだから、別に不思議ではない。来客の足洗いに使った鍋で飯を炊き、客が驚くのに平然としていた良寛禪師顔負けの野戦であった。

教育隊卒業のころは、エトロフ西端近くの海岸に横山中隊は移動駐留していた。原隊復帰をした私は、早速、帰隊の申告に立った。

「やあ宮城兵長、ご苦労」と言った中隊長は大尉になっていた。

「教育隊を二番で卒業して鼻が高いよ、中隊の名誉である。これからも頑張ってくれ、本日より下士勤務を命ずる」と、例のごとくドモリながら言った。それが懐かしくもあった。神妙に答礼した私は内心おかしかった。

ネズミ族特攻隊員だった私が、表面だけは優秀な成績で卒業したことが隊の名誉となる軍隊を、またしても不思議に感じた。

翌日から下士勤務として本部への命令受領に出され

た。一段高いところに立った週番士官は、用紙を持って二度しか読まない。整列した各中隊の下士官たちは速記する。軍隊用語は同一語が多い。そのまま書いては間に合わない。私は点や棒線の符号を使ったので、余裕があった。教育隊のお陰である。

帰途、必ず泣きそうな顔をした書き漏らしの下士がいる。伍長か軍曹の下士は兵長の私に聞きやすいのだろう。そうした下士に丁寧に教えてやった。礼としてタバコをもらった。明日なき命と覚えたタバコはありがたかった。支給されるタバコは濃霧のため、巻紙がカビている。それでも野戦では貴重品である。戦友にも分けてやれるからだ。食料下給品を公正にやったかつての上官であり、古年兵たちは不満顔であったが、文句はつけなかった。「宮城兵長になって助かったヨ」と、ある一等兵が低い声でささやいたのを覚えている。

終 戦

派遣された高角砲陣地は、いち早く撤収した海軍の置き土産である。岩盤をダイナマイトで爆破し、洞窟を掘った。松の丸太で組み合わせる陣地が艦砲爆撃で

一瞬につぶされることはだれよりも私は知っていた。しかし、実戦の話も知らぬ上官連は張り切っている。

お陰でモッコ担ぎの天秤瘤が右肩にでき、終生當時を語る記念となった。

八月九日、日ソ中立条約（二十一年四月二十五日まで有効）を侵犯し、ソ連が参戦、広島に新型爆弾（原爆）が投下された情報も伝わった。我が部隊もエトロフ島での玉砕を覚悟した。そして運命の八月十五日を迎えた。

同日何時か不明だが、陣地の山中にも伝令が来た。

「直ちに海岸の広場に集結せよ」とある。不吉な陰が走った。工具を放り投げ山を下り海岸に急いだ。広場は既に各中隊の兵で埋まっていた。壇上に上がった広川部隊長の姿をかすめるようにガスが流れていた。部隊長の言葉はかすれて、途切れ途切れだ。「気をつけ……今日は重大なことを伝達する。先ほど軍司令部より、本日、玉音放送があり大日本帝国天皇はポツダム宣言を受諾した旨の伝達があった。大日本帝国は戦争に負けたのではない。一時休戦を受諾したのである……」

云々」と言って降壇した。奇妙な演説だ。兵たちにはポツダム宣言とは何のことかわからない。ただ戦争が中止になったことだけは理解したようだ。私も宣言の内容はわからなかったが、日本が降伏したことは理解できた。戦況、米軍の圧倒的な物量戦法を事ごとに教育隊で耳にしていたからだ。複雑な気持ちだった。不透明な先の不安は去らなかつたが、命がつながったと思った。その命が自分の元に帰ってきた意識を強く感じた。帰隊した三角兵舎の中はテンヤワニヤの憶測や雑談でにぎわっていた。

翌日になると、終戦の意味が現実のものとなってきた。真新しい軍衣服、軍靴、靴下が支給され、タバコや羊羹、キャラメルの甘味品に合成酒まで下給された。一切の作業は取りやめ、盆と正月が一遍に来たようなものだ。兵たちはこの先の不安もあつたが、退屈のぎにトランプや花札で下給品を並べ、賭け事に興じている。まさに天国だった。中には甘味品も食べずに、衣類と交換し、家に持って帰るんだ、と言う古年兵もいた。

終戦二日後、軍隊生活五年以上の者は民間の漁船を利用して内地帰還の命あり、中隊で七名の古年次兵が出発した。後は漁船と暁部隊の大発艇を使用して逐次内地帰還するとの達しがあり、一同喜んだ。帰還が確定的と信じたからだ。そのころになると、ポツダム宣言受諾とは日本が降伏したことであつたのを知つた。

と同時に、いろうなうわさが兵から兵の耳に伝わつた。内地は爆撃で壊滅し、食もなく、帰還してもどうしようもない、とか、男は重労働に狩り出され、女は米軍の慰みものにされる、といったあんばいである。そのうち、師団司令部が兵隊の給料を持ち逃げて、北海道に行つたという情報も流れた。三カ月分の給料が未払いになつてゐることは確かだ。当時、私の給料は月二十四円くらいだつた（当時の米価は六十円）。金は全く必要のない守備隊だつたから父母のもとに二度送金したが、一度だけしか届かなかつたという。

二十年に入ると全く音信が途絶してゐた。島の近海に出没する敵潜水艦の跳梁は激しく、沿岸警備艇に乗つてゐた同郷の秋山上等兵は浮上した潜水艦に砲撃さ

れ戦死した。せつかく湾内に入港した貨物船が魚雷で撃沈され、大発艇で救助に駆けつけても乗員は事切れてゐた。真夏でも暖炉を焚く北海の海は冷たく、三十分の生存が限度だつた。二度ほど妹から便りと一枚の写真が届いた。十九年のときである。作業場建築完成記念写真だつた。両親と妻と、会津女学校（現、会女高）の制服を着た妹はかすりのモンペを履いてゐた。近所の人が一人、計五人である。故郷にある思いで懐かしかつた。

北海道から三、四百キロの島なのに、濃霧と荒海が兵を孤島感覚に陥れた。

鮭鱒、マツカワ、タラバ蟹の豊富な島の近海に、各中隊は幹部の私費で漁船を買い、漁業者の兵をもつて魚を取り、現地給与を貰つた。立て続けにタラバ蟹を食べ、下痢を起こしたこともしばしばあつた。その漁撈班の清水班長以下数人はいち早くその漁船で逃亡、北海道に渡つた。彼はとうに故人となり、ふんだんに魚を食べさせてくれたのを思えば憎めなかつた。私は帰還に不吉なものを感じてゐた。同僚の伊豆野上等兵

を誘い逃亡を図って、毎日、高台から港を探ったが、ついに漁船の入港はなかった。昭和二十年九月四日、ソ連軍が上陸した。

武装解除と強制連行

我々にも「武装解除のため天寧海岸に整列せよ」との命が出た。ソ連軍は上陸直後、砲、重火器、弾薬を接収していた。続いて兵の軍装検査となった。浜辺に整列して初めて見るソ連兵に驚いた。マンドリン（銃身の元に五十発詰め丸の弾帯のついた短い自動小銃がマンドリンに似ていたので、そう呼んだ）を肩にかけ、汚れた青い葉つ葉服を着て、赤い肩章が目立つ。ツバのない中折れ帽をかぶり、その下の顔は特に驚いた。眉毛が白く、皮膚は色染めのように赤く、若者か老人か一瞬戸惑った。背も別段高くなく、一口に言うとし山猿の兵隊に出会った感じだ。腕時計もなく、声を出すたび、銃ごと、体を振って命令する。一装用の真新しい軍服、軍帽に、腕時計をかけた日本軍に比較すると、どっちが勝ってどっちが負けたのかわからない。後日「ヤポンスキー（日本）はこんな物だけつくるか

ら負けたんだ、ロスキー（ソ連）は銃、弾薬をいっぱいつくった」と自慢する。「それは違う。ヤポンスキーは世界じゅうを相手としたから負けたのサ」とやり返した。この山猿兵のわからぬ「ダワイ」の号令で初めて両手を挙げたときの屈辱的な思いと、降伏という現実の作爲が名状しがたい不思議なものだった。それも内地帰還の喜びで耐えていた。ポケットから手榴弾が見つかったとかで、ポケット検査は丹念だった。帯革、短剣も取られ、完全に丸腰にされた。風穴が開いたようで落ち着かない。将校だけは帯刀を許可した。軍人としての礼儀だと言う。後日わかったことだが、彼らが自由に捕虜として左右できるまでを指揮官として利用する考えだった。

その夜の三角兵舎はソ連軍の監視下に置かれた。わずかな兵の監視と見えて、夜間になると時々、自動小銃で威嚇射撃をする。私は勝手知ったる糧秣庫から水あめを一缶かっぱらい、分隊員に配って、しゃぶっていたところへ、ソ連の軍曹が入ってきて拳銃を胸に突きつけられたときは、これでおだぶつと思って目をつ

ぶった。

やがて乗船の報が通達され、全員、天寧飛行場に集合せよとなった。一年余り守備したこの島ともお別れである。ふと千恵子のが胸をよぎり、彼女の無事を祈った。

飛行場は乗船の兵で混雑していた。周囲を見ると、ところどころに衣服類が山積みされている。そのうち伝達があり、衣服類は一枚に限られ、防寒具は許可、乾パン三日分の携行のほかは全部指定の場所に存置せよとなった。

食べもせずタバコと交換して、甘味品やら靴下をため込んだ三十代の古年兵、S上等兵は泣きそうな顔をしていた。物資のない家族への土産と考えていたようだ。

そうしているうちに、ソ連兵の掠奪が始まった。日本兵の腕をやにわにまくり上げ、腕時計を取ったり、万年筆を取り上げる。私もやられたが、時計はなく、ツバを吐いて立ち去った。野卑なソ連兵を見て、交換して出征した妻の腕時計を襟章の中に縫い込んでしま

った。後、シベリアで黒パンと交換し、延命の糧となった。

ヒトカップ湾の埠頭には千トン以上と思われる貨物船が三隻、煙突から薄く黒い煙を吐いて停泊していた。目で我々の乗船する船であることがわかった。マスと船首に赤い旗がたなびいている。明らかにソ連船であることがわかった。日本には鉄船がない、だからソ連が内地送還してくれるのであろうと解釈した。兵は指揮官の命に従い、手回りの装具を背負って隊列をつくり、乗船の順番を待った。「ダモイ東京」と連呼しながら、ロスキーソルダートがマンドリンを肩に下げ、隊列をせき立てる。ダモイはわからぬが、「東京」だけは内地帰還を意味していると信じた。

やがて順番がきて、船用起重機にぶら下がった番線のモッコが目の前に下がってきた。十人ずつモッコに入り、鉄線にしがみついた。起重機が最高に上昇すると、船が小さく見えるほどだ。めまいして手を離すとおだぶつである。必死だった。人間扱いでなく、完全に貨物扱いである。乗船でなく物資の積み込みだった。

起重機が半回転して船底の貨物庫におろされて、また驚いた。薄暗い電灯に照らされて映った広い船底には、重なり合うように日本兵がびっしりとした。いたというより積み込んだ生き物の群れである。異様な光景だった。

私は舷側に張られている木枠の上を居場所とした。少し危険だが足も伸ばせるし、窮屈でもない。何人か同様の兵がいた。ただし、片手を棧から離すわけにはゆかない、どうせ一晩か二晩の辛抱で北海道に上陸できると思った。

既に船は出港していた。エンジンの音、舷側をたたく波のしぶき、船の揺れが大きくなったので判別できる。途中、樺太の大泊に停泊したが、間もなく出港、単調なエンジン音だけが響く。高級将校が通訳を通して船の行き先をただしたが、日本内地への輸送とのみ答えたという。蒸し暑く、むっとする人いきれも、お猿まがいの片手使用いすも我慢できたが、尿意だけではどうしようもない。元来、私は膀胱が小さいのか、小便が近い。後日、悪環境のシベリアで一晩十六回、放

尿した記録を覚えている。したがって、缶詰の空き缶二個を準備していた。しかし、その空き缶も満杯となり、いよいよ生理に迫られた。真ん中の鉄柱に直立した鉄梯子がある。甲板への出口である。何段あるのか、見上げたが見当もつかない。人をかき分けたどりついた梯子である。ポケットの缶を大事にして、ひと足ずつ慎重を期した。尿で満杯の缶が懐であふれ、腹に冷水がしみ込んでくるのがわかった。わかってもどうなるものでもない。シマッタと思ったが、そのまま甲板に出た。夜だった。突然デツキの物陰からソ連兵が飛び出してきて、「ダワイ、プイストラ」（早く行け）を連発してマンドリン（自動小銃）を突きつける。言葉はわからないが、意味はわかった。私は小便のまねをした。「ダワイ」と落ちて着いた声でソ連兵は首を斜めに振った。その方に便所があった。処理を済ませてホツと息をつき、深呼吸をして、北海の夜気を吸った。人心地を一瞬味わった。

ふと見ると、左手の暗い海のかなたに四つ五つ、電灯の明かりが小さく見える。懐かしかった……。稚内

の明かりだろうか……。戦中の灯火管制も解け、平和を取り戻した祖国を見る思いだった。もうすぐだと感じた。夜空は満天の星がまたいた。子供の時分教えられた北斗七星を発見、そこから追って北極星をつかんだ。船の進行方向が北極星に向かっている。：これは変だ：と直観した。もしやの不安が脳裏をかすめた。短い時間の判断だった。不幸にしてその直観的判断は的中した。翌朝、再び甲板によじ登った私の目に映った風景は、船の進行方向の右手にどこまでも続く陸地があった。樺太沖を北進していることが確実であることが理解できた。これは内地送還でなく、ソ連側の意図的策謀に乗せられたことを悟り、これまで抱えた夢が無残に打ち砕かれた実感が五体を駆けめぐった。

やがて乗船の船は樺太（サハリン）北方と思われるその対岸の港に着き、ソ連兵に追い立てられながら上陸を開始した。

シベリア抑留の日々

にわかづくりの安っぽい港のようだ。後年知ったこ

とだが、ソフガワニ港だった。すぐ貨車に乗せられ、しばらく走ると一つの収容所に着いた。あきらめ切れぬ兵たちは、一カ月でもただ働きさせればソ連も得だからナ：といった調子で、日々が死と直面する希望皆無の長いシベリア抑留の始まりだとはだれも気づかなかった。軍隊の組織体制ではあったが、かつての軍律的厳正さは終戦とともに緩み、ノルマのない作業は日暮らしの休憩場所だった。作業から帰ると、酸味のある黒パンが出た。通常では食べられない代物だった。

部隊長から次のような訓示があった。「現在、内地は大混乱になっており、我々の上陸を受け入れる港がない。食料も極度に欠乏している。したがって、これらが收拾つき次第、我々は帰還できる、それまで日本人らしく頑張ってほしい」。またもやソ連側の受け売りである。私は、時間があつたのに何もできない国家権力の無能を思った。

十月八日の午後であった。シベリアの落葉樹は黄ばんではいたが、初冬には早かった。作業現場の空が陰ったかと思つたら、やにわに大粒の雪が降ってきた。

たちまち一面が白くなった。エトロフでさえ十月は、青空にほころぶ高山植物のかれんな花が咲き乱れる。

故郷は赤い柿の実が天高き秋空に熟れている時節である。それなのに一面銀世界と化したシベリアとは一体何であろうか？ 先が思いやられた。不思議とその日のことが忘れられない。

この収容所にどのくらい滞在したであろうか？ 作業大隊を編制し終わつたころは十一月の厳冬を迎えていた。零下二〇度近くに温度は低下していた。持参の食料はとうに尽き、食料は日々に少なく、千島以来の残された体力が支えになつてきた。三十を超した老兵は目に見えて衰弱していった。

大隊ごとに貨車に詰められ、移動が始まつた。奥地のコムソモリスク郊外の収容所へ行くという。抑留生活が定着しつつあつた。

虜囚の悲劇

シベリア大陸を走る汽車の鉄路は南満州鉄道より幅が広い。日本軍はソ連侵攻に備え車両が伸びるようにつくつた。敗戦は逆にこれを利用され、関東軍のあら

ゆる物資を略奪し、ソ連領に運んだという。独ソ戦で二千万の人命を失い、モスクワ周辺まで都市、農村の別なく破壊された。ソ連は津軽、宗谷海峡を経て、米国から多量の食料援助を受けた。米製のラード缶を私たちも見ている。関東軍の物資は最も手つ取り早い戦利品であつた。

シベリアの列車は迂回してもトンネルはない。つなげるだけの貨車を引いて走る。いつ後尾の貨車が尽きるのかと思うほどの長列車である。輸送力を補う手段のようだ。各駅には山積みの薪が積んである。無尽蔵の原生林が燃料であり、夜間望見すると、煙突から吐き出す火ボタが輝き、まるで火事が走っているようだ。鉄路の周辺は木々が焼けただれて、黒い枯れ木が軌道に沿つてどこまでも続く。

シベリア大陸は地球規模で見なければわからない。

平成三年六月、社員旅行でジェット機に乗りパリに行ったことがあるが、ところどころに雪原のちらつくシベリア上空だけで約八時間くらい要したのでも推量がつく。

ソフガワニ近くの収容所から乗車してコムソモリス
クまで八百キロ近くの距離を列車はのんびり走る。長
い貨車の列と薪燃料の機関車では当然かもしれない。

貨車の中は二段式になっていて、草布団の上に兵た
ちがビッシリ並んでいた。食事の黒パン分けは大変、
急造の棒杵に基準おもりをつけ、わずか二百グラムの
配分をするのに少しでも軽いと割箸木を差し、小さな
パンをつける。ひげだらけの目が秤に集中する。少し
の上下も許されない。食事当番は大変である。怒号が
飛び交うときも、まれではない。

かつての精銳日本兵も、既に餓鬼地獄に落ちていた。
私を含め、あの目は確かに餓鬼の日であった。そして
寒さは日々につのつた。

私たちは一つの収容所に入った。生来、私は地理音
痴で数多くの収容所を転々と渡り歩いたが、そこが第
何収容所か記憶にない。コムソモリスとハバロフス
クくらいしかわからない。口々に加速する絶望と数多
くの死者を見るたび帰還の夢は途絶え、凍土の骨とな
る身に何の必要があろうか、私はそう思った。中には

克明に記憶している者もいた。まるで刑事か岡っ引き
の類であろう。

落ち着いた収容所は、既にかつての中隊員もなく、
在満部隊の兵が一番多くいた。

収容所は、ソ連がシベリア開発のため、政府批判を
やったり、例えば妻を殴って告訴されれば三年くらい
は犯罪者としてシベリア送りである。純然たる犯罪者
はもちろんだが、甚だしいのは陰口によってシベリア
送りになった人もいるという。つまり、必要な人員を
送る手段として犯罪者を仕立て上げると言った方がわ
かりやすいと思う。まるで佐渡金山掘りの人夫狩り出
しに諸国の無宿者を徴発した江戸幕府のやり口に似て
いる。こうした国策的囚人を収容するためにつくった
建物に日本軍、ドイツ兵を、戦争で失った労働力の補
充としてシベリアに連行した。捕虜とは戦中つかまつ
た兵を言う。ところが、ソ連はポツダム宣言当事国で
ありながら、同宣言第九条にある「日本国軍隊は、完
全に武装ヲ解除セラレタル後各自ノ家庭ニ復帰シ、平
和的且生産的ノ生活ヲ営ムノ機会ヲ得シメラルベシ」、

輸送手段の許す限り速やかに將兵を日本に送還すべし、とあるを、ソ連のスターリンは無視した。ポツダム宣言受諾後の日本軍は捕虜としてではなく、まさしく強制連行し、抑留生活を強いたのである。

ここで収容所と食料についてご説明したい。収容所は丸太を積み重ねてつくった、いわば山小屋を大きくした建物であり、屋根はコバを葺き、壁の内外に棧を打ち、その上に土壁を塗り込み、白く石灰を溶いて塗ると仕上がりである。真ん中に薪を焚くペーチカがあり、二重ガラスの小さな窓がある。これで零下五〇度の寒気に耐えられる。後述するが、不潔な囚人が入れかわり立ちかわりした室内の柱には、南京虫が敷き詰めに巣くっており、夜陰となれば一斉攻撃を仕掛ける。一つの収容所には千名ほど入れる棟数が建っている。入り口には武装したソ連兵が歩哨小屋に立っていて、周囲はほぼ四角四方に四メートルほどの先のとがった丸太を並べて組み上げ、その内外に有刺鉄線を張りめぐらしてある。さらに角々には高い櫓を建て、その上にマンドリンを肩に下げた歩哨が昼夜の別なく立って

いた。事を発見するとつり下げた鉄路をたたくようになっており、夜間はオイルを浸した布を焚き照明としていた。逃亡どころではない。塹に近づき射殺された者もいた。

食事は絶対量少なく、次々と栄養失調となり倒れる者が続出し、そして死んでいった。食料さえ十分なら、零下三〇度を超す雪の重労働にも若さで耐え得たと思う。二十年の冬を越し、翌年五月の春を迎えるまでの死亡率は大変なものだった。六万余の死者のうち、その八〇%が異国の凍土に埋められた。五万近い戦友が望郷の念を果たせず死没した。その全部と言っても過言でなく、栄養失調が原因で倒れた。いわば、じり貧の餓死と言える。ちなみに、二十代の若者が一日必要とする重労働者の摂取キロカロリーは平均三千三百五十キロカロリーである。零下三〇度（野外労働の限界温度だったが、寒暖計もない適当なものだった）の野外重労働なら四千キロカロリーは必要であろう。日本兵に与えられたカロリーは千から千二、三百キロカロリーだった。不足分は自分の肉体を消化し、尽きれば

骨と皮ばかりになって死を待つばかりである。

B收容所は、既に雪景色だった。何月かも定かでない、目に映ずる物だけが意識を左右していた。山も建物も人のひげも、凍てついた氷の雪に包まれていた。だが、指揮官の日本元大尉は元気だった。わずかな黒パンと湯水のようなスープをすすっていた兵を前にして、張りのある声が響く。

「氣をつけ：皇居遙拝。終わり。敵側の要請により本日の作業を伝達する。第一小隊は鉄道作業、第二小隊は伐採、第三小隊は建築、以上の区分にしたがつて直ちに出發せよ」といったぐあいである。抜刀こそしないが旧軍隊そのままである。敵側と言おうが、皇居遙拝であろうが、日本人通訳が適当に伝えるから、心配はない。わずかな食料の中から、ソ連兵、作業監督のソ連人、それに旧軍将校連の幹部が食料を割合した残りを何百人の作業隊で配分するのだからまったものではない。張りのある将校の声に比べ、ソルダート（ソ連の監視兵）と作業監督のソ連人に「ダワイブイストラ（早く歩け）」と追い立てられる日本兵の列は、

まるで屠殺場に引かれてゆく仔羊のような姿だった。だれもが生き延びて祖国に帰りたいものを、命の綱である食べ物にも階級がものをいうとは……。着古したシューパー（緬羊の皮を裏返しにしてつくった外套）に身を包み、防寒帽の顔は頬がこけ、眉毛も髭も寒雪で白くなっている。足にはカートンキ（フェルトでできた長靴）を履き、中はボロきれを幾重にも巻き込んでも、カートンキが減って、穴でも開いたらたちまち凍傷で腐ってしまう。むしろ、そうなって作業から外された方が死を逃れる有効な手段だったかもしれない。シベリアの原生林は、至るところに白樺、エゾ松、トド松の巨木が密生して、その奥を知らない。寒気とともに大木のしんまで凍る。二人で引くピラ（鋸）やタポール（斧）で切る作業は氷を切るのと同じだ。したがって、倒れる瞬間は予定の方向に行くとは限らない。弱り切った兵の足元は自由に動かない。木の下敷きになって死ぬ兵が日増しに多くなっていく。ソ連人監督は責任上、飛び回ってどなっているが、湿気のない雪の上に薪を運ばせて焚き火を囲んで終日いるのは、

決まってソルダートと日本将校だった。気温は朝夕が重なるにつれ、ぐんぐん下がってゆく。規定は零下三〇度を超すと作業中止となるが、一体、だれが測のか分かったものではない。枯れ木のような死者が何人かたまと、馬そりに積んで埋葬当番に当たった者が墓地に運ぶ。墓地といっても、雑木の短く狭い草原である。カチカチに凍った土は二メートルもある。全く岩石同然だ。やせた腕でツルハシを振りおろす兵の運命は、明日が死者の我が身だった。

既に、ダモイ（帰国）の夢も消え果て、今、生きていることが不思議であつた。飢餓の日々から解放された死者をうらやんだのもこの時分である。

ろくに穴も掘れぬ兵の埋葬した死者は、春六月ごろになり雪が消え始めると腕や足を地上に伸ばしていた、という戦友の話だった。

生きるため、私は一つの手段を考えた。それはオーカー（場所によってオツペとも言ふ）になることだった。ソ連の捕虜労働規定では、毎月、虜囚の体位を検査して五段階に分ける。

カルトシカ（じゃがいも）かトウモロコシ、粟を塩味でやわらかくした茶飲み茶碗に一杯くらいの量が主食であり、ほかに食油と実を浮かしたスーブの夕食（その日によって変わる）を食べる、というよりすつた後、一段目の続き寝台の上にすつ裸になつて背を向けて並ぶ。両側の真ん中は、並べた丸太の表面を荒削りした廊下がある。そこへ将校の軍服を着た女医が記録者の兵を連れてやつてくる。

やせた日本人の尻が淡い裸電球に照らされてずらりと並ぶ。見事とは逆さのペチャ尻の展示場だ。記録兵がロシア語で書かれている姓を一人ずつ呼ぶ。よほど耳を澄まさないと聞き漏らしかねない。「みやぎ」、が「メラケ」とくる。目の先に並ぶお尻を、女医は片手の指につかんで引つ張る。その伸び具合によつて体力の等級を決めるのである。正に原始的だが、いずれ劣らぬペチャ尻、等級別の判定には合理的だったのかもしれない。兵たちが緊張する一こまである。重労働か、そうでないか、の関ヶ原である。

伸びが悪いと一級か二級の重労働である。三級は大

体、病院下番（退院）の屋内軽作業となる。四級は不具障害者。問題は五級の『オーカー』である。尻引き女医の力加減の不公平はあつても、ともかくぐつと伸びれば『オーカー』に合格だ。一カ月は屋内で休養できる。有効な延命策と言えた。徴兵検査と全く逆である。もつとも甲種合格になれば、当時は必ずと言ってよいほど戦場行きだから、さして変わらなかったのかもしれない。重労働と戦場の違いはあつても、命がかかっていることには変わらない。私はオーカーに合格した。合格とはこちらの内心であるから、表面の自慢にはならない。

もともと第二乙種のやせたノッポが都合よく、我慢に我慢して検査に備え、下痢と称して三日前から減食し、隣友に分けてやった。目がくらむような作業の三日だった。

背骨に腹の皮がへバリついている。危険な賭けでもあった。そして、『オーカー』のC病院に回された。

死体解剖

私は『オーカー』の制度がなかったら、入ソの冬、

確実に死んでいたと思っている。地獄に仏の制度だった。私はこれを可能な限り活用した。しかし、危険と運用努力が伴う。私は抑留生活二年間の、その半分近くは『オーカー』で暮らしたと思っている。

ソルダートは日本兵を「ヤポンスキーソルダート、ヒートレ」と言った。日本兵はズルイという意味だ。ポツダム宣言、中立条約違反は無学に近い彼らにとつて不明だったとしても、だまし打ちの強制連行は当事者である。それを棚に上げ、必死に生きるための手段をヒートレは筋違いだ。根こそぎ動員により、終戦近いころ召集された関東軍の兵は「一つ 軍人は忠節を尽くすを本分とすべし」とある軍人勅諭を、古年兵になると「一つ 軍人は要領を尽くすを本分とすべし」の本音に変わっている。しかし、にわか召集の関東軍初年兵は、地方生活道義と意識のままに抑留されたからたまらない。死亡者の多くが関東軍初年兵だと言われている。私は二度の召集により、わずかであつても、通算一年四カ月の軍隊生活を経験し、やせても枯れても下士勤務兵長である。関東軍初年兵とは違っていた。

加えて、私は、ばか正直ながら信ずることには猪突猛進型で、反面、これはだめとなると損得を考えず、徹底した反骨精神を発揮する。それが矛盾する軍隊、不当な抑留生活に鎌首をもたげたとしても何ら不思議ではなかった。

『オーカー』収容所の一カ月休養は、おのれにいろんなことを教えてくれた。同僚との退屈しのぎは、決まってオハギや餅、赤飯の話になる。出ないツバで喉を鳴らし、しのぐ。余裕をなくして入院するオーカーは死んでいく。私の隣に枕を並べていた同僚は、朝になつたら冷たくなっていた。添える花一輪もあるわけでなし、肉親、知人が見守るわけでなし、黙って迫る運命の中で骨皮になつて死んでいく。二十代の若者が飢餓で死ぬのだ。どういうことなのだろう……わからなかった。わかつたのは、何としてもここでは死んでならぬということだった。

一カ月の休養で体力が幾分よくなつてきた。また作業大隊かと思うとたまらなかつた。熱が出たと言つて診断を受けたが、異常がない。「熱をはかれ」と言つ

て体温計を置いていった。熱以外に内疾患と認めないソ連医師は、引きずつて歩く神経痛や足痛は病氣として認めない。技術の高いヤポンスキードクトル（日本軍医）は尊敬され、特別な待遇のようだった。私は体温計の水銀部分を毛布にこすり三八度にし、そ知らぬ振りをしていた。ソ連ドクトルは体温計を見て、手を額にやったが、げげんな顔をして体温計を振り水銀目盛りを下げて、「もう一度はかれ」と言つて出ていった。私は、また毛布にこすつた。それが過ぎて四〇度以上になつた。下げようと慌てたところヘドクトルが来て体温計を見ていたが、首をかしげ「ヒートレ」と言つて出ていった。

翌日『オーカー』解除となり、三級の営内軽作業隊に編入された。場所も変わり、一般収容所並みの続き板場の寝台となつた。収容人員が多く、体位を斜めにし頭部を交互にしないとおさまらない窮屈な続き寝台だった。それでも営内軽作業だからありがたい。

ある夜のことだった。隣、といつても頭は私の足元にある池上という兵が半身を起こして「宮城さん、糞

をやるから作業をかわつてくれないか」と言う。私の作業は出入り口の雪かきだった。氷割りと言った方が適切である。作業の内容を聞くと、滅菌室の火焚きで夜間作業であつた。衣類の滅菌と折々、死体の後片づけと言う。池上は、どうしても死体の片づけが気持ち悪く嫌だと言う。だれだつて、戦友とはいえ、死体いじりを好む者はいない。しかし、私は考えた。どこから粃を手に入れたか、その粃が吸い寄せられるほど欲しかった。それに夜間とはいえ、室内の火焚きである死体のことは余り考えなかつた。

そして、その翌日の晩から滅菌室の勤務となつた。滅菌室は丸太を厚い壁で包み、薪を焚く釜から幾重にも折り曲げた煙突を通し、百度近く加熱し、衣類を周囲に干し滅菌する、いわば土蔵のようなものである。日本兵の持ち込んだシラミを完全に退治したのもこの滅菌室である。月に二度くらいの入浴には、着ている物、毛布までこの滅菌室に入れる。小さな手桶に二杯の湯を配給され体をふくのが入浴である。日本兵の理髪屋がいて、ひげをそり、毛シラミ退治と称して両腕

のわき毛と、チンチンの竿を引っ張り陰毛を奇麗にそり上げる。まるで裸の雀のようだ。これではシラミも生息する場所はない。しかし、毎夜、夜襲する南京虫は一向に無頓着だから不思議だ。外套を着て両袖を口で結わえたひもで縛り、顔を包んで南京虫の夜襲に備える。

私は、作業の引きかえにもらつた粃を瓶に詰め、火を焚きながら棒で突く。そして白米にしたのを飯盒で焚き、千島以来の米飯のにおいを堪能し、空腹を満たし、人心地を久しぶりに味わつた。食後、拾つた煙草の吸いがらを吸つた思ひは、人間であつたことをわずかの時間ながら回復した。しかし、その翌夜が本番だつた。

珍しく室内には温度計があり、今夜の温度を十五度にせよとの連絡があつた。室内の温度を調べに入つたら、煙突の破れ穴から漏れこぼれる火の明かりでボンヤリ足元が見える。突然グニヤリとした感触が足に伝わつた。なれた目でよく見ると、素っ裸の死体である。顔から胸にかけてどす黒い鬱血の筋が流れていた。そ

の先にも二人寝転がっている。一人は伐採で倒木の下敷きになったのだろう。後の二人は無傷だった。肋骨に陰をつくっていた。栄養失調の死亡であることは明らかである。池上の話のとおりであった。だが私は、その死体を無感動に眺めた。そのむごい死体は、これからの我が身につながってゆく自己恐怖に結びついて背筋が寒くなる。後で考えると、それは一時、私が生きていた意識を取り戻したときだったからである。

翌朝、三十がらみのソ連将校女医が助手を連れて解剖にやってきた。日本では身元不明を死体と呼び、身元がわかるのを遺体と言っている。シベリアでの取り扱い虜囚はすべて死体だった。気がつかなかったが、入り口にあった板の台は解剖用の寝台だった。その上に戦友の死体を乗せた。枯れ木を運ぶような軽さと姿だった。頬はこけているが、童顔を残した顔もあった。エプロンをかけた女医は長いゴム手袋をはめると、助手の出す鋏を持って局部の上から首筋まで手際よく切つて、皮膚の皮を両側いっぱいに広げた。瘦せてもドス赤い肋骨、腹の内臓がむき出しになった。私は一瞬

顔を背むけたが、成り行きを直視した。

助手のソルダートは小型の鋸を持って、死体の鎖骨から肋骨へ広い幅に切った。両側を切り離してから、肋骨を取って、傍らに置く。既に女医は肺、心臓、腸その他の臓器を取り出し、いじくり回している。十五度に温めた死体は生臭いにおいを漂わせる。血のりが女医のゴム手袋を染めていた。もう助手が、既に額から切り離れた頭髮のついた頭蓋骨を傍らに置き、手に持った白い大脳小脳を女医に見せている。何とも形容しがたい光景である。二時間ぐらいたったであろうか。三人の解剖を終えるとソ連の二人は手を洗い、何の表情も見せずに立ち去った。二人の顔は、死ねば物体としか考えない唯物論の意識そのままの顔だった。

いじりつ放しの死体の処理が手伝いに来た日本兵の仕事だった。脳と頭の部分はどうしようもなく腹に詰め込み、その上に切り離れた肋骨を当てがい、皮膚の皮を寄せ、両側に三カ所の穴をあけてこよりで結び、着ていたヨレヨレの下着を着せ、外へ持ち出す。零下何十度の寒気はたちまち死体を枯れ木の冷凍に変えて

しまう。それを別棟の死体置き場に入れる。馬そり一つ分の死体がたまれば埋葬当番が墓地に運ぶ。そんな死体処理を一カ月くらいやり、百体近い死体を処理したであろうか？　いつの間にか、私も手慣れた死体処理人になっていた。現在も遺体に対する嫌悪感が一般人より少ないと思うのも、当時の後遺症かもしれない。復員者にこのような体験をした人を訪ねても、いまだ会ったことがない。

地獄の呼笛と脱走計画

死体解剖処理の三級クラスから二級にされた私は、貨車に詰められ二日ほど走ったD労働収容所に移された。粉雪の舞う、寂しげな収容所だった。毎朝毎夕、哀れな虜囚の白い隊列が雪と寒気にまみれ、ソルダートとソ連人囚人監督にせき立てられて続く。

最初の仕事は、広い雪原に一定間隔の場所に兵が配置され、二メートルの穴を掘る作業だった。それが一日のノルマだった。カチカチに凍てついている岩石まがいの表土は、はねのけた雪の下に広がっていた。先のとがった鉄棒で突いて掘るのである。二メートルは

おろか、その半分くらいで短い日は暮れかかる。重々労働だった。あしたのパンは減食となる、ノルマが達成できないからだ。夕刻になると、ソ連人の発破係が、浅い穴に舌打ちしながら六本くらいを束にしたダイナマイトを入れていく。終わると遠くに離れ、身を屈めて導火線に点火する。次々と爆発音と同時に土煙を上げるさまは、さながら戦闘時の砲撃を思わす勇壮な光景だった。こうしないと土砂運搬に使う大型ユニボも無力なのだ。しかし、虜囚の兵は極度に体力を消耗していった。

D収容所はよほど辺鄙な位置にあったものと思われ、なすことすべてがいかげんなもののように、夜間作業が虜囚に加重されてゆく。

兵の虜囚に配給されるわずかな朝食の黒パンをポケットから盗む者、炊事係が腐ったカルトシカ（じやがいも）を捨てる大きなごみ箱には夜になるといつも三人くらいの兵が入り、腐ったイモを捨てていた。それを飯盒でゆでて架盒（飯盒の上にはめる、おかずを入れる浅い器物）に塗りつぶし、真っ黒に焼いて食べ

る者、どこから拾ってきたのか、動物の骨を黒焦げにし、深夜カリカリとかんでいる音が何とも異様な感じである。戦友と思つて気を許し、話し込んでいる間に外套の裾をごっそり切り取られていることもあった。手か足に巻く防寒衣となつてゆく飢餓地獄絵図が展開されていた。

「我々は帝国軍人である。話に聞くような振る舞いは名誉ある軍人の恥辱である。かかる行為は厳に慎み、胸を張つて帰還するまで頑張つてほしい……」旧部隊長の訓示である。たらふく部隊長に何がわかるか？兵には既に、そんな反撃する気力も意識もなくなつていた。

ある夜、寝静まつた兵の耳に遠鳴りの汽笛が聞こえた、何回も流れてくる、何であろうか？と思つているうち、ソルダートが慌ただしく「ダワイ、ダワイ、ブイストラ」と大声でたたき起こした。嫌々ながら防寒衣を着て、暗い野外に整列した。棒の先につけた油布が赤々と燃え周囲を照らし、ソルダートとソ連人監督が右往左往している。感覚も失う寒気が粉雪とともに

兵を包んでくる。ツルハシ、エンピ、大きな金槌の作業員が渡され、各小隊は隊列をつくつて雪原に出た。どこをどのように歩いているのか、全くわからない、四キロほど歩いた鉄路に無蓋長蛇の貨車がとまつていた。一つの貨車に数人ずつ割り当てがあり、積んである山のような土砂をおろす作業である。手始めは無蓋車の側板を倒すことである。側板は頑丈な四本の鉄杭でとめてある。私もやつたが、持つてきた鉄槌で両側の杭を下からたたき外す。両側の二人が呼吸を合わせることと、外れれば同時に退避することが大事だ。さもないと側板が頭に落ちてくる。夜間作業のせいと弱つた足元が敏速でなく、これで死んだ者が何人かいた。命がけの作業であつた。貨車に上がつても凍てついた砂利は岩盤に等しく、ツルハシを振るう弱つた力では、なかなか崩壊しない。どこまでも地獄の鬼たちは罪なき虜囚を痛めつける。これが地獄でなくて何であろうか。

砂利を両側におろし終えて帰路につくころは、かなりの時間が経過していた。ふらつく足を夜の雪原に運

ぶ隊列の中から倒れる者も出てきた。そして、翌朝十時になると昼間作業に駆り出される。たまったものではない。私はこの収容所が最後の場所と思うようになってた。

夕刻の帰路、未完成鉄路の枕木を歩いていたとき、目がかすんで枕木の高低が定かでない。既に鳥目になっていたのだ。私はよろけて転倒した、起き上がろうにも立てない。

「ダワイ、ブイストラ、ダワイ、ブイストラ」を連発し、マンドリンの床尾板（銃を肩に当てる木の部分）でしりを突つく。ふらつく足でようやく立ち上がる。それでも敵が心もわかず、意識が朦朧（もろろ）として、全く夢遊病者同然の状態になっていた。病休を取ろうとしても高熱以外は許可されない。絶体絶命まで追い込まれた。そんなことには関係なく、夜の汽笛は二日置きに響いてくる。兵たちは『地獄の呼笛』と呼んで身震いした。私の隣に菅野という上等兵がいた。前身が上方の監督をやっていたとかで、現役兵だけあって体格もよく、元氣者だったが、彼すら日々に声を落と

してきた。「おい、宮城、このままではおだぶつだよ、何とかせにやらんぜ」と私に声をかけた。「そのとおりだ、しかしどうすればいいんだ？ 脱走しかないじゃないか」そう答えた。菅野は相槌を打って「その脱走だよ」と深刻な表情を見せた。

私は沈黙して考えた。作業中にオボロナ（便所へ行く）と言って許可を取る。それが成功したとしても、その後をどうするか。まず食料、武器、ソルダートの軍服も必要だ。夜間のみ行動し、北極星から見一人東海岸に到達すれば昆布もあるし、塩気も取れる。海岸を南下すれば朝鮮半島に出られる。もちろん何年もかかるかもしれない。座して死を待つより、行動して運がなければ死ねばよい……そんな思考が頭をもたげた。ソルダートを襲撃するには短刀をつくらねばならない。もちろんその人肉が自分の食料である。人肉食に抵抗はなかった。南方の激戦地では当然な行為として行われた話を戦後、耳にした。極限に追い込まれると人間も野獣になることを後日思った。パンを減食し、当面の食料も蓄える必要がある。大胆でリスクだらけ

の計画も、生きる望みを失った者のみに生まれる特権思考だった。収容所から逃亡して射殺された兵もいた。そう決断すると、残余の力が腹の底からわいてきた。夢遊病者に希望と夢を与えた。

「菅野、やろう」私はきっぱり言った。

二人は翌日から準備に入った。黒パンを三分の一ずつためた。鉄板を見つけ、作業のすきを盗んでタボー（斧）で二十センチほどの短刀をつくり、ペーチカで焼いて、水にくぐし、焼きを入れた。人一人くらいは刺し殺せる短刀ができた。パンはなかなかたまらなかつた。そして日々がたつた。ところが大移動が発令され、菅野と別れてしまった。生死を誓った相手を失って、私は落胆した。そしてこの計画も挫折してしまつた。もし実行していたら確実な死が待っていたに違いない。その後、彼はどうなつたであろう、忘れ得ぬ思い出だけを残して再会の機会は今もつてない。出会の奇遇を思う。

そして私にも運が回ってきた。菅野と別れて幾ばくもなく、私は立派な「オーカー」に合格した。しかし、

分乗したトラックの旅は必死だった。寒凍の雪原は平地であればどこでも走れる。日露戦争時にソ連軍はバイカル湖に鉄道を敷設し、兵員、武器を満載した長い列車が湖上を疾駆したという。

望郷の星座

「オーカー」を満載した数台のトラックは雪原を突っ走る。雪煙を寒風に巻いてどこまでも走つた。全長で五百キロはあつたと思う。今考えると、ニコライエフスク郊外だと想像できる。収容所は北極星が真上に近かつた。よほど、北シベリアだった。

私は小便が近い。膀胱の収縮がノンビリできているのかもしれない。水つ腹の虜囚であれば放尿回数が一層加速する。E収容所では一晩に十六回の記録を持っている。そのことを考え、トラックの後尾端に乗つたトラックの側板は太腿くらいまでだ。詰めるだけ乗せた兵は皆、立ちんぼうだ。

E収容所は原生林に囲われた孤独な位置にあつた。頼るものはおのれ以外にない。虜囚にとって大切なものは、生き延びる条件の良否だけだった。その点、ど

こであろうと食が幾らでも量があり、作業がなければ天国と言えた。Eはそうした収容所だった。

私は草布団をいち早く通路に敷いた。丸太の荒削りにはすき間があった。そのすき間から寝たふりの床返りで放尿できるからだ。エネルギーの消耗を防ぐことだけが延命の手段だった。すぐ凍る尿においはいない。同僚への気兼ねから音を立てないように断続的に放尿するコツも身についた。

ある朝、収容所の管理人が大声でどなりながら入ってきた。「ポキモ、ヤボンスキーソルダート、ダワイ、スマートリ、スマートリ」と言う。つまり、日本兵は悪い、こちらに来てこれを見ろ、というわけだ。仕方なくペーチカを離れて内玄関になっているわきを見たら、黄色い氷の固まりがある。軽作業の当番が割った薪に放尿した結果である。それだけでなく、外にも出ると言う。見ると一面黄色の水である。五十メートル離れた野外便所に行く兵はいないらしく、たれながらUターンするのである。これは私も経験済みだ。その日、当番がツルハシで黄色い氷の破壊作業に取りかかる。こ

の犯罪は一向に改善されず、ついにソ連兵もあきらめたか、文句も言わなくなった。小便も浸透する前に凍てつくから深度は浅い。しかし、大便だけはそうもいかない。土を掘った長い穴に板を渡しただけだ。たれる後ろからすぐ凍るから、長い穴の列には「槍が岳連峰」が連なっている。慌てて腰を屈めケツの穴に大怪我をした兵がいた。笑えぬ「シベリア物語」である。

私はある夜、大便に立った。用が終わると、ふと夜空を仰いだ。満天の星座が煌めいていた。どの星も光が強く、手の届きそうな近くを感じた。シベリアで美しいものを初めて目に映じた。こんな美しい星座を見たのは生まれて初めてだった。幻想的で、いつとき、虜囚の身も忘れしばらく立ちつくした。

北斗七星はどれだろう、余り多くの星に魅惑され、発見できないほどだった。幼き日々がよみがえってくる。小さいときから教えられて育った星座だった。懐かしい思いである。そして、北極星を探し当て、驚いた。ほぼ真上近くに光っていた。いかに北に来たかが推量できる。

とうに幾度捨てた帰還の夢なのに、ここまで来ては再び故山に帰ることのできない現実を知らされた思いだった。そして、東に位置する祖国の方角に目を落とした。そこには黒い原生林が深々とあった。その上に煌めく星を見つめ、十カ月同棲した新妻を思った。艶のよい丸顔のヨシノはどうしているだろうか？ 三年の音信不通である。それに、厳しい母の手元にある生活を考えて、実家に戻った公算が胸に広がってくる。それとも再婚しているかもしれない。帰る夢を捨てた己には無用の不安だったのに……。思ひは逆に、あきらめの中から大きく膨らんでくるもののようなだった。そして、父母の安否を思い、学生の妹を思った。弟も兵隊に取られたのだろうか？

わずかの時間だったが、とめどなく望郷の思いが星座の中からわいてくるのがどうしようもなく深まってゆく。そして入ソ以来、初めて人間らしい涙を流した。今はただ『異国の丘』に永遠に眠る六万余の若き霊に心から『霊よ安らかなれ』と祈り続けるのみである……。

合 掌

捕虜記

シベリア抑留生活一、一〇〇日

石川県 中田 繁

◎…平和を祈ろう…

戦争は再び起こすまじきに

憂うべし 人類の……闘争

祈ろう 世界恒久の平和を

復員したところに、よく「異国の丘」の歌を口ずさみ、やけに体を熱くした。それは、望郷の念を募らせ、切なかつた日々を絡めて歌いつつ、しんしんと心が痛んだ。惨涙残して逝った戦友の姿が目に見え、喉から離れなかつた。また戦友らを残して帰還を先にした、その申し訳なきとした思いをたどるのである。手記に成し、還らざる戦友たちと収容所で過酷な労役に服したその生き地獄を書きとどめることで、シベリア抑留、